

地域ぐるみの子育て支援活動

～三木市「人の目の垣根隊」を事例として～

Child-rearing Support Activities with the Cooperation of the Whole Community

— From the Survey in Miki City —

清水 美知子*

Michiko SHIMIZU

抄 録

本稿では、地域ぐるみの子育て支援活動について、兵庫県三木市「人の目の垣根隊」を事例にとりあげ考察する。同市では2004年6月、子どもが犯罪に巻き込まれるのを地域ぐるみで防ごうと、市民に下校時の見守りを呼びかける運動が始まった。その運動は「人の目の垣根隊」という市民ボランティア組織に発展、2005年6月より、あいさつ・声かけによる見守りやパトロールがスタートした。現在の会員は約1000人。地域ぐるみのユニークな活動ぶりが話題になり、他市町からの問い合わせが絶えないという。「人の目の垣根隊」が地域ぐるみのボランティア団体として発足するまでの経緯と、その後の1年半の活動を紹介するとともに、今後の活動のあるべき方向性について考える。

1. はじめに

2005(平成17)年9月、学生たちと三木の街中を歩いて調査していたときのことである¹⁾。口吉川地区で集団下校する小学生の一群と出会った。不審者対策のひとつとして、子どもたちは地域別に集団で登下校しているという。ふとみると、子どもたちのすぐ後ろを、緑色のベストを着た一人の男性が歩いていく。同行の地元の方に「あのグリーンの服を着た人はどなたですか」と尋ねたところ、「あの人ですか。人の目の垣根隊ですよ」という返答。「ヒトノメノ カキネタイ???」。「見守り・声かけのボランティアです。今年の6月から始まったんですよ。ああやって、子どもたちを家の近くまで送っていくんです」。

その後、フィールドワークの3日間に、他の調査対象地区である自由が丘小学校区でも広野小学校区においても、緑色のベストを着た人たちに筆者らは出会った。集団下校の付き添いだけではない。下校時に小学校の前で声かけをしている人。交差点など交通量の多い場所に立ち、安全指導をしている人。児童の下校時に自宅の前に立って見守りをしている人など。その大半が60歳以上と思しきシニア世代で、男性の姿が目立った。

* 関西国際大学人間学部

筆者は10数年前より、「祖父母の孫育て」を研究テーマのひとつとしている。ここ4～5年は、血縁の祖父母のみならず“地域の祖父母”であるシニア世代の子育て支援に焦点をあて、聞き取りや観察による調査を続けてきた²⁾。調査研究を通して、①コミュニティ施設(公民館、児童館、子育て相談センターなど)を拠点として、ボランティアによる子育て支援活動の数は増えており、その中心的担い手がシニア世代であること、②シニア世代には支援活動に意欲的な人が多いこと、③支援活動を通してシニア世代に“生活の質”の向上が見られること、④施設ボランティアの多くが女性であり、男性の関わりはきわめて少ないこと、などが明らかになった。

“子育てオープンルーム”などコミュニティ施設でのボランティアは、乳幼児とその母親への直接支援であるため、支援者も女性を中心とならざるをえない。これに対して、“子どもの見守り・声かけ”ボランティアは、男女を問わず、いわば地域ぐるみで参加することができる。

本稿では、地域ぐるみで取り組む子育て支援活動として、「人の目の垣根隊」を事例にとりあげる。地域全体で子育て支援の活動にたずさわるようになった経緯と、活動の内容、そして活動に関わるボランティアたちの意識について明らかにするとともに、今後の活動のあるべき方向性について考える。

2. 「人の目の垣根隊」発足まで

2. 1 「地域の子どもを地域のみinnで守ろうやないか運動」

三木市は、兵庫県の東播磨地域に位置し、神戸市や加古川市、小野市などに隣接する。神戸の中心部まで電車で1時間弱ということから、ベッドタウンとして開発が進む地域でもある。

2005(平成17)年10月2日、三木市は吉川町を合併、“新しい三木市”としてスタートした。平成17年の国勢調査速報値によれば、新・三木市(三木市+旧吉川町)の人口は約8万5千人、世帯数は約2万7千となっている。総人口に占める年少人口(15歳未満)の比率は13.2%、老年人口(65歳以上)の比率は21.2%である³⁾。三木市は大きく、三木、別所、志染、細川、口吉川、緑が丘、自由が丘、青山、吉川の9地区に分かれ、筆者の勤務する関西国際大学は青山地区にある。

2004(平成16)年6月23日付『神戸新聞』(三木版)は、市教育委員会や警察署などの主唱で、「地域の子どもを地域のみinnで守ろうやないか」運動がこの日から始まることを伝えた。その一部を紹介しておきたい。

子どもが犯罪に巻き込まれるのを地域ぐるみで防ごうと、市教委や三木署などが市民に下校時の見守りなどを呼び掛ける運動が23日から始まる。運動の趣旨に賛同した、市内で会社を営む男性(51)が「参加者の結束を固めて」と、ロゴ入りのポロシャツ200枚を市に寄贈、同日、緑が丘東小などに集まるPTA会員や老人会会員に配られる。…(中略)…ポロシャツは緑、ピンク、それぞれ三種類のサイズがある。同運動のロゴと「パトロール隊」の文字が背中に印刷されている。

当日は、自由が丘、緑が丘、青山地区の住民有志約 200 人が市内をパレード。緑が丘東小学校と自由が丘小学校の児童の下校を見守った。翌 6 月 24 日付の『神戸新聞』では、「子ども守れ、地域結集」という見出しで、パトカーの先導により一斉下校する自由が丘小学校の児童や、警察官より“刺股”の使い方を学ぶ緑が丘小学校教諭のようすが、写真とともに報じられている。

このような運動が始まった直接的なきっかけとしては、三木市において不審者を目撃したという情報が大幅に増えたことがある。2002 年度(2002 年 4 月～2003 年 3 月)における不審者目撃は 1 年間に 12 件、2003 年度(2003 年 4 月～2004 年 3 月)には 23 件だった。それが 2004 年度に入って 4 月と 5 月だけでも 11 件に及んだ⁴⁾。また、子どもが痛ましい犯罪の犠牲となる事件が、マスコミ等でしばしば取り上げられるようになったことも影響している。

「地域の子どもの地域のみinnで守ろうやないか」運動の主唱者のひとつである市教育委員会・青少年センターでは、長年、子どもの非行防止を中心テーマのひとつとして活動をおこなってきた。それが今や、子どもが犯罪加害者ではなく被害者となる事件があとを絶たない。職員のあいだに「もはや放置してはおけない。地域の子どもの安全は地域の住民で守らなくては」という思いが高まり、この運動の発案に至ったという。

2. 2 見守りボランティアの組織化

「地域の子どもの地域のみinnで守ろうやないか」運動は、先述の新聞報道にも示される通り、自由が丘、緑が丘、青山など、三木市のなかでは“新興”住宅街を中心にスタートした。サラリーマン家庭が多く、昼間は人通りの少ないこれらの地域において、不審者を目撃したという情報が後を絶たなかったからである。

住民有志によるパトロールは始まった。しかし、不審者目撃情報は減らず、2004 年度の上半期(4 月～9 月)だけで 27 件と、前年度の年間件数を超えてしまった。不審者は自動車で移動することが多く、一部の地域のみパトロールするのでは効果をあまり期待できない。市内全域に運動を展開するには、やはり組織化するしかない。そこで、青少年センターでは 2004(平成 16)年 11 月、子どもを見守るボランティア組織を立ち上げることに決めた。名づけて「人の目の垣根隊」。11 月 19 日付の『神戸新聞』(三木版)は、市民ボランティア組織「人の目の垣根隊」の立ち上げについて報じている。その一部を引用しておこう。

[不審者が出没するのは]特に下校時が多いため、市は子どもを見守る近所の「目」を増やそうと同隊の発足を決めた。不審者対策に、全国規模で取り組むのは初めて。／来月から全市でボランティアの募集を始めるが、モデル地区の平田小学校区は先行し、18 日までに老人会員など約 20 人が登録した。／登録すれば名札型の会員証が発行される。散歩や買い物などの行程に通学路を組み込んでもらい、子どもに声を掛けたり公園を見回るなど、自分のできる範囲で長く続けてもらおう。今後はボランティア保険への加入も考えるという。(〔 〕内筆者)

「人の目の垣根隊」というネーミングは、「地域全体で子どもを見守る，“人の目の垣根”をつくりましょう」という教育長の呼び掛けにヒントを得たもの。自治会、町内会レベルでの見守り活動は各地に見られたものの⁵⁾，“市ぐるみ”での組織化は先例がない。「どうすればいいのか、手探りでした。お手本にしたものがあるかって？ 兵庫県 A 市の H 運動を視察に行きましたが，“声かけ”が中心。たいして参考にはなりませんでした」と、三木市立青少年センターの職員は当時をふり返る。センターでは、市民ボランティアの組織化と並行して、小学生を対象とした防犯教室の開催も始めた。同じく 11 月 19 日付『神戸新聞』（三木版）は、平田小学校での防犯教室のもようを、次のように伝えている。

住民と一緒に子どもの安全を考える防犯教室は、自由が丘小に続いて二回目。今回は特に、子どもの下校途中を狙った不審者対策に重点を置いた。／不審者の早期発見につなげるため、声を掛けられた子どもが犯人の特徴をどこまで詳しく覚えられるかを試す訓練もあった。各学年の代表二人が前に並び、不審者役の三木署員らが声を掛け、立ち去った後に服装や持ち物などをボードに書き込んだ。／六年生の O さん（12）は「二人組のうちの一は特徴をよく覚えていたけど、もう一人はどうしても思い出せなかった。とっさの出来事では、思ったほど記憶できないことがわかった」と話していた。／署員らは「帽子や眼鏡など、服装は上から順番に覚えて」「忘れないうちに、車のナンバーを地面に書く方法もあるよ」などと、アドバイスしていた。

この教室には、老人会会員や青少年補導委員など住民有志約 40 人も参加。児童と一緒に下校し、地域全体で子どもの安全を守ろうと確認しあったという。三木市ではまた 2004 年 12 月より、市教育委員会が学校や警察に寄せられた不審者情報を地図にまとめ、インターネットのホームページ上に公開するサービスを始めた。同年 4 月～10 月に発生した“子どもへの声かけ”“車への連れ込み未遂”“痴漢行為”などが発生した場所を、五万分の一の地図上に示すとともに、曜日別や時間別に分類したグラフも添付している。この「不審者出没マップ」は、一カ月ごとに更新される（『神戸新聞』2004 年 12 月 2 日付）。

2. 3 「人の目の垣根隊」の結成

2005（平成 17）年 2 月、三木市教育委員は、子どもを守る市民ボランティア組織「人の目の垣根隊」会員を、3 月 1 日から募集することを発表した。市内 14 の小学校区（当時）ごとに約 50 人、市全体で 800 人体制をめざす。500 人を超えるボランティアを市が公募するのは初めてのこと。活動の際には専用のジャンパーと帽子、腕章、名札を着用。市は 2005 年度予算案に、制服の費用などとして 430 万円を計上した⁶⁾。

図 1 は「人の目の垣根隊」募集チラシである。会員募集にあたり三木市教育委員会は「人の目の垣根隊設置要綱」をまとめた。要綱によれば、「人の目の垣根隊」は市教育委員会が設置し、推進団体として 14 団体（三木市・三木警察署・三木防犯協会・三木市交通安全協会・警友会三木支部・三木市連合 PTA・三木市子ども会連合協議会・三木市区長協議会連合会・三木市連合婦人会・三木市老人会連合会・三木

地域ぐるみの子育て支援活動

市青少年補導委員会・三木市民生委員児童委員協議会・三美更正保護婦人会) が名を連ねている。

「人の目の垣根隊」の会員を募集
温かいまなざしと温かい声かけを地域の子どもたちに

- 1 募集目的
子どもたちを温かく見守り支援する大人を地域の中に増やしなが、地域の子どもは、地域で守り育てるという気運の醸成を図り、地域の連帯感と教育力を高めることで、子どもたちが明るく生き生きと生活できる地域社会をつくるのが目的です。
- 2 募集期間
平成18年5月15日～平成18年5月31日まで(募集期間を過ぎても継続して申し込みを受け付けます。)
- 3 募集対象者
原則として三木市在住・在勤の20歳以上の方
上記目的に賛同された方、ならびに子どもの健やかな成長を真に願っている市民の方々が特別な資格や条件はありません。
- 4 主唱 三木市教育委員会
- 5 推進機関団体
三木市・三木警察署・三木防犯協会・三木市交通安全協会・警友会三木支部・三木市連合PTA・三木市子ども会連絡協議会・三木市区長協議会連合会・三木市老人会連合会・三木市青少年補導委員会・三木市連合民生委員児童委員協議会・三美更生保護女性会
- 6 活動内容
(1) 身近な子どもたちに、「おはよう」「こんにちは」「おかえり」「さようなら」と積極的に声をかけながら顔の見える関係をつくる。
(2) 良い行いに対して、ためらわずその場で褒め声をかける。
(3) 子どもたちの良き理解者、相談相手になるように努める。
(4) 事故につながる危険な箇所、子どもたちを誘惑したり犯罪に巻き込む恐れのある場所等、地域の環境の再点検と事件や犯罪から子どもを守る。
(5) 危険な遊びやルール違反をしている子どもを見つけたら、見て見ぬふりをせず注意する。
(6) 活動は、日常的に無理のない程度で、活動をする。
(7) 活動の中には、小学校及び中学校の登下校時間の立番も含むものとする。
(8) 活動は、日常生活の中での個人的かつ自主的な活動で、メンバーとしての規制や義務を負うものではありません。
又、メンバーの皆様にはあくまで青少年健全育成ボランティアとして活動していただくため、報酬等はありません。
- 7 申し込み方法(問合せ先)
「人の目垣根隊メンバーズ」登録書に所要事項を記入し、園児・児童・生徒をとおして各校・園に5月31日までに提出してください。
(問合せ先)〒673-0433三木市福井1933-12
三木市青少年センター
電話 0794-83-2020
FAX 0794-82-5881
- 8 登録料について、
1,000円(帽子・ジャンパー・腕章・名札を支給、またボランティア保険に加入します。その一部に充てさせていただきます。登録料は説明会時に徴収させていただきます。)
- 9 その他
活動時は帽子・名札を着用し、ジャンパーまたは腕章を着用していただきます。

図1 「人の目の垣根隊」会員募集のチラシ

市教育委員会ではこれとは別に、「人の目の垣根隊活動について」というB4用紙1枚の一般市民向け会募集の説明書を作成した。この説明書では、「人の目の垣根隊」のねらいとして、チラシには次のように書かれている。

近年、不審者や通り魔的犯行が増加するなど、子どもが被害者となる事件が急増していることから、大人が「地域の子どもを守り育てる」という意識の醸成とともに、こうした事件から子どもを守る活動を強化することが求められています。／三木市教育委員会では、青少年育成団体をはじめ、関連機関団体と協議して「地域の子どもを地域のみinnで守ろうやないか運動」を展開していますが、この運動をさらに発展させるため、「人の目の垣根隊」を設置することにより、子どもを犯罪、事故等から守り、もって安心安全で快適な地域づくりに資することをねらいとしております。(傍点筆者)

「地域の子どもを守り育てる」というフレーズが見られるものの、「犯罪から守ること」が前面に打ち出されており、「人の目の垣根隊」は青少年健全育成ボランティアのひとつとして位置づけられていることがうかがえる⁷⁾。

次に、メンバーシップ、活動の内容、活動の留意点について要約しておこう。

【「人の目の垣根隊」メンバーシップ】

①趣旨に賛同し、②三木市内に在住在勤の、③20歳以上で、④子どもの健やかな成長を真に願っている人であれば、誰でも会員になることができる。

【「人の目の垣根隊」活動の内容】

募集チラシ(図1)と同様に8点があげられているが、おもな活動は「子どもへの声かけ活動」「安心安全で快適な生活環境の点検活動」「パトロールと見守り活動」の3つに大別できる。

【「人の目の垣根隊」活動の留意点】

- (1) 公的機関から認定された資格・身分ではない。
- (2) 自分から実践できることから実践する。
- (3) 必ずユニフォームを着用する。

「人の目の垣根隊」の活動は、あくまで個人的、自主的な活動であり、メンバーとしての規則や義務を負うものではない。いっぽうで、「補導」したり「取り調べ」といった権限もない。子どもの異変に気づいたり、不審者を目撃したからといって、自分で解決しようとせず、状況を直ちに警察や青少年センターに連絡するようにと、説明書には記されている。

特筆すべきは、「人の目の垣根隊」会員として登録するには登録料(1000円)が必要なことであろう。登録料を徴収することについて、市教育委員会内では賛否両論があった。市民からも「ボランティアをするのになぜ、お金を払わねばならないのか」という声が寄せられた。しかし、会員はボランティア保険(年間一人500円)の加入が必要になるし、ユニフォーム一式(ジャンパー、帽子、腕章、名札の4点)代として7~8千円かかる。何よりも、「“お金を払ってでも活動に加わりたい”という人に会員になってほしかったので」、あえて登録料の徴収に踏み切ったのである⁸⁾。

2月初旬より、「人の目の垣根隊」募集要項説明会が始まった。関連団体(区長協議会、公民館長会、自治会、老人会、婦人会、子ども会など)への説明会をはじめ、一般市民を対象にした説明会も市内各所で開かれ、二百数十名以上が参加した。

2005年5月23日、緑が丘町公民館と口吉川町公民館の二カ所で、「人の目の垣根隊」会員の研修会が開かれた。参加した会員は二会場あわせて約100人。ユニフォーム一式が配られ、三木署員らが活動のさいの注意点を説明した。その日の夕方の散歩に、さっそくユニフォームを着用する会員も見られた。研修会はその後27日まで、市内の6会場で開かれた⁹⁾。

5月23日現在での会員登録者数は453人。「できる人が、できる時に、できる範囲で」がモットーの「人の目の垣根隊」が、いよいよ発足したのである。

3. 「人の目の垣根隊」の取り組み

3. 1 4カ月で会員数800人を突破

2005(平成17)年7月15日付『神戸新聞』(三木版)は、「人の目の垣根隊」への登録者が目標の800人を超えたことを報じた。当初は今年度中の達成をめざしていたのが、3月の募集開始から約4カ月で到達し、市教育委員会も「予想外のペース」だという。市教育委員会では、会員がより活動しやすい環境をつくろうと、各市立公民館に専用の掲示板を設置した。また、夏用ユニフォームを新たに作り、会員へ配布することにした。

図2は、「人の目垣根隊」のユニフォーム一式(5点セット)である。黄緑色のジャンパーに緑色のベスト、オレンジ色の帽子には、図3のようなシンボルマークが描かれている。地域・学校・家庭と子どもを象徴する人の形に大きな目は、「たくさんの目で子どもを守る」という意思表示にほかならない。腕には白い腕章、首には赤いストラップのついた会員証。ユニフォームで歩く姿は、かなり遠くからでも目立つ。こうした出で立ちの効果であろうか。不審者目撃情報は、6月～11月の6カ月間で8件。前年の同期間19件の半分に減ったという。

2006年1月26日付『神戸新聞』(三木版)は、「不審者発生が大幅減」という見出しで、「人の目の垣根隊」活動の成果を次のように伝えている。

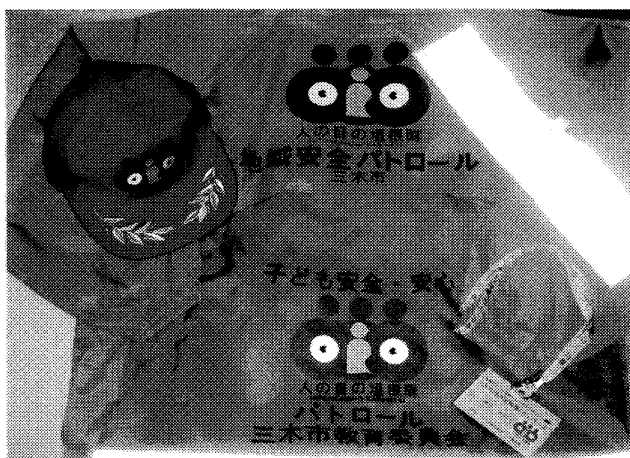


図2 「人の目と垣根隊」ユニフォーム(5点セット)

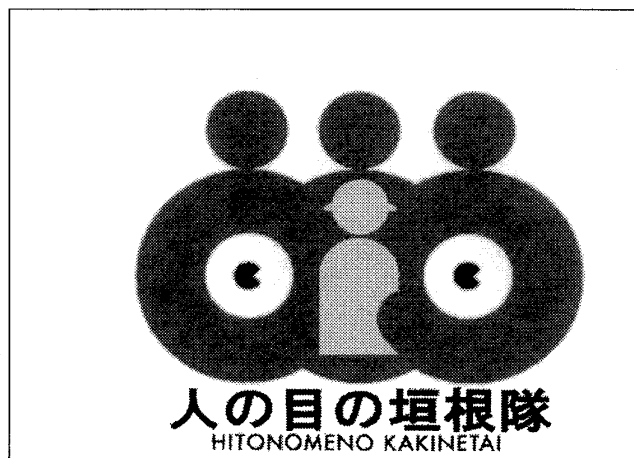


図3 「人の目の垣根隊」シンボルマーク

地域ぐるみの子育て支援活動

平成16年度の市内の不審者発生件数37件に対して、今年度は昨年12月末現在で13件。垣根隊は「もっと会員数を増やして地域の防犯を強化したい」と子どもの安全確保に意気込んでいる。／垣根隊の登録者数は1月末現在1047人。平均年齢は57.7歳という。活動は自主性に任されている。緑色のジャンパーとオレンジ色の帽子のユニホームを着用して、子どもの登下校時に校門で立ち番をする人、買い物や犬の散歩のついでに通が迂路を見守る人など活動内容はさまざま。／しかし、活動の成果は不審者発生件数の減少だけに留まらない。三木署によると、空き巣狙いや事務所荒らしなどが前年比で半減。有田智章副所長は「垣根隊を含めた地域の防犯活動が定着した成果」と分析する。

発足から半年が過ぎ、「人の目の垣根隊」の取り組みは、当初の期待どおりの成果をおさめた。“地域ぐるみ”のユニークな取り組みが話題になり、市教育委員会には各地から視察や講演依頼が相次いだという。

3.2 会員アンケートにみる活動状況

とはいうものの、新たな課題も浮かび上がってきた。登録者は1000人を超えたにもかかわらず、日常的に活動している人は少数派なのである。「できる人が、できる時に、できる範囲で」がモットーの活動である以上、会員だからといって強制することはできない。

2006(平成18)年2月、市教育委員会は「人の目の垣根隊」会員に対し、教育長名で、図4のような次年度登録確認の葉書を送付した。ボランティア保険(年額500円)が一年毎の更新制であるため、継続の意志を聞く必要が出てきたのである。そのさい、あわせて活動状況に関する簡単なアンケートを実施した。以下では、その調査結果を見ておきたい。

アンケート葉書は2006年2月10日に発送した。発送した会員数は1049人。うち839人より回答があった(回収率は80.0%)。回答者のうち、次年度の活動を「中止する」という回答は66人(7.9%)にとどまり、9割以上が「継続する」と

平成18年度人の目の垣根隊の活動について	
・ 継続する ・ 中止する	
(該当する方に○印を入れてください)	
登録番号	名前

人の目の垣根隊活動アンケートについて	
貴方の日頃の活動に該当する項目にレ印をご記入ください(複数可)。又必要事項を記入ください。	
<input type="checkbox"/> 登下校の送迎	(月間 日程度)
<input type="checkbox"/> 立ち番	(月間 日程度)
<input type="checkbox"/> 制服着用での散歩、買物等	(月間 日程度)
<input type="checkbox"/> 危険個所の見回り	(月間 日程度)
<input type="checkbox"/> 子どもへの注意	
<input type="checkbox"/> 子どもへの声かけ(挨拶)	
<input type="checkbox"/> 学校行事への参加	
<input type="checkbox"/> その他()	
ご意見があれば下記にご記入ください。	

図4 「人の目の垣根隊」会員アンケート

地域ぐるみの子育て支援活動

答えている。

図5は、アンケート回答者に対し、活動内容を複数回答でたずねた結果を示したものである。

「危険箇所の見回り」が70.4%と最も多く、以下、「立ち番」(65.7%)、「子どもへの声かけ」(60.9%)、「制服着用での散歩、買物等」(57.7%)、「登下校の送迎」(57.1%)と続く。

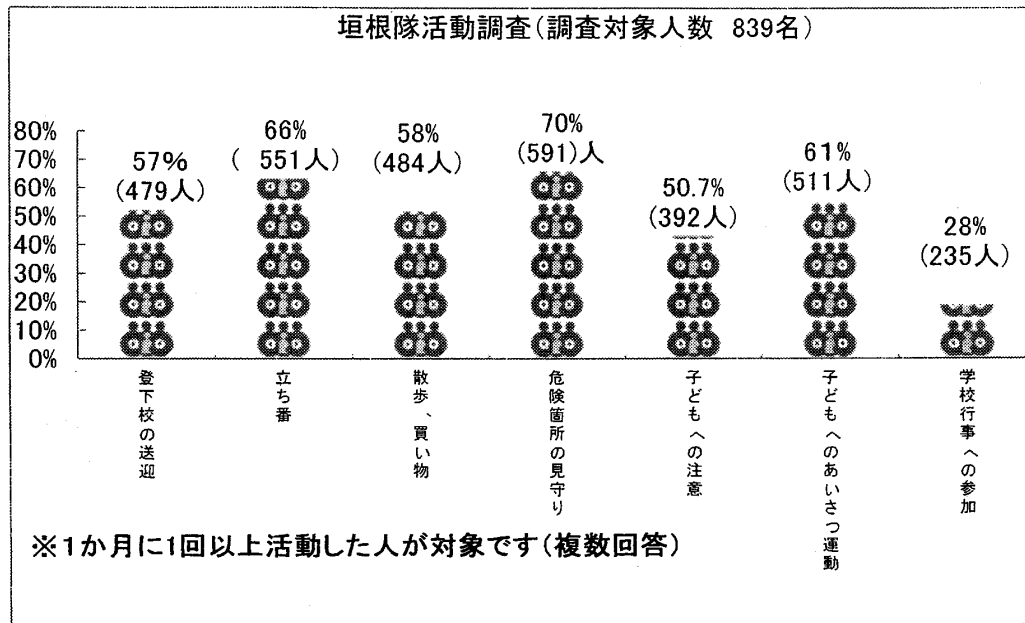


図5 「人の目の垣根隊」会員の活動状況

活動日数を記載した人に対して月当たりの平均活動日数をみると、最も多いのが「登下校の送迎」で9.01回、「制服着用での散歩、買物等」8.36回、「立ち番」6.49回、「危険箇所の見回り」4.95回となっている。週2回は児童の登下校の送迎をし、5日1度は立ち番をして子どもを見守り、週1回は街の危険箇所を見回り、3日に1度はユニフォームを着て散歩や買物に出かけていることになる。

なお、活動項目のみに「レ印」をつけている人を月1回の活動とカウントし、記載のある人の回数とあわせて回答者全体の月間平均活動日数を算出すると、「登下校の送迎」4.0回、「立ち番」2.6回、「制服着用での散歩、買物等」3.7回、「危険箇所の見回り」1.9回であった。

このアンケートではまた、数行ではあるが自由に意見を記入する欄が設けられている。それを見ると、会員たちの日ごとの活動ぶりが見えてくる。いくつかを紹介しておこう。

- ◇毎朝夕、犬の散歩で見守っています。買い物も歩いて行きます。戸外に出ることが多いので、出来るだけ気をつけています。[女性]
- ◇垣根隊活動とあわせ美化活動も行っている。また、車にステッカーをつけ危険箇所を見回っている。効果があると思う。危険箇所に立て看板を増やして欲しい。[男性]
- ◇登下校の送迎をするようになってから、子どもたちの挨拶が大変よくなってきた。子どものほうから笑顔で挨拶するようになってきた。[女性]
- ◇通勤を兼ねたパトロールをしている。[男性]

地域ぐるみの子育て支援活動

◇登下校時、児童・生徒のほうから挨拶する回数が大幅に増えました。また、登下校時のゴミ拾いもタバコの吸い殻、空き缶等も少なくなったようです。〔男性〕

◇子どもたちの見守りだけでなく、お年寄りの見守り、声かけも心がけています。〔女性〕

散歩や買物のさいにも、子どもの安全を意識して行動するようになった。あまり接点のなかった街の子どもたちと、顔見知りになった。街の危険箇所や交通量にも関心を持つようになったなど、「人の目の垣根隊」の活動を通して、会員たちが得たものは少なくない。いっぽうで、「下校時間が学年によって異なるので大変むずかしい」〔男性〕、「メンバーが少ないので負担が大きい」〔女性〕、「犯罪がどんな時間帯に起こるのか知りたい」〔男性〕などの苦言・要望も多数寄せられた。

「活動報告会を開催してほしい。会員間の親睦と安全対策の現状報告を説明してほしい」〔男性〕、「父兄、先生方との意見交換の場が必要と思う」〔女性〕、「子ども、保護者、学校の意見や感想を聞いてほしい。会員の要望、感想も」〔男性〕といった会員の要望に応えるため、市教育委員会では2006年度より、学期毎に各地で会員の意見交換会を開くことを決定した。

3. 3 意見交換会の実施

2006年5月30日付『神戸新聞』（三木版）は、「不審者目撃数が半減」という見出しで、「人の目の垣根隊」が6月で結成1周年を迎えることを報じた。「市に寄せられた不審者の目撃情報は2004年度は37件だったが、05年度は15件と半分以下に減少。今年1～4月の空き巣や窃盗事件は、前年同期比19%減になった（三木署調べ）」という。

こうした活動内容の充実をはかるために、市教育委員会は6月中旬から下旬にかけて地区（小学校区）ごとに意見交換会を開いた。8会場9回の意見交換会への参加者は合計166名。会員、市教育委員会の職員のほか、各小学校の校長（もしくは教頭）、PTA代表なども出席していることから、主催者側が、意見交換会を“地域・学校・家庭”の交流の場と位置づけていることがうかがえる。

意見交換会では、不審者目撃情報の説明、2月に実施した会員アンケート結果の紹介のあと、会員から活動状況や成果が報告され、問題点の指摘、市への要望などが出された。ここではまず、「人の目垣根隊」活動の成果について、“ユニフォーム”と“挨拶・声かけ”に焦点をあて、特徴的な意見を紹介しておこう。

① 「人の目垣根隊」活動の成果

【ユニフォームの効果】

ユニフォーム（黄緑色のジャンパー、緑色のベスト、オレンジ色の帽子）の着用には、「抵抗を感じる」という人も少なくない¹⁰⁾。いっぽうで、「ユニフォームを着ていて、子どもたちから挨拶が返ってくるようになった」〔別所公民館会場〕、「ユニフォームがあることで声かけしやすい。子どもが安心する」〔吉川公民館会場〕、「子どももユニフォームを一つの目安としている」〔自由が丘公民館会場〕という声からうかがえるように、子どもたちにとって“ユニフォームを着ている人＝自分たちを守ってくれる人”であり、その効果は大きいことを会員自身が認めている。また、「ユニフォームを着る

ことで、会員の誰が来て誰が来ていないかわかるようになった」〔自由が丘公民館会場〕というように、地域においてどのくらい人数が実質的に活動しているかという目安にもなる。

【挨拶・声かけの効果】

「当初は小さかった挨拶の声が、しだいに大きくできるようになりました。子どもの成長がよくわかります」〔別所公民館会場〕、「12月から登下校時に子ども10人くらいを見えています。挨拶は当初はしなかったが徐々に返ってくるようになり、現在では先に挨拶してくれます」〔口吉川公民館会場〕などの声に示されるとおり、「挨拶・声かけ」は、子どもの変化が最も実感できる活動のひとつである。「子どもの並び方がよくなり、挨拶ができるようになりました。どこでも挨拶してくれます。子どもを通して親との交わりができました」〔緑が丘公民館会場〕、「野菜作りの夫婦に見守りを依頼したりして、皆に声かけしながら活動しています。制服を着なくても向こうから挨拶してくれます」〔志染公民館会場〕というように、活動を通して子どものみならず、大人（保護者など）との交流が増えたことも副産物のひとつだろう。

②「人の目垣根隊」活動の問題点

もっとも、活動を通してさまざまな問題点も見えてきたのも事実である。意見交換会に出席する会員は、登録者のなかでも活動に熱心な人が多い。彼らの目を通して浮かび上がった問題点について、ここでは3つの点にしぼって見ておこう。

【学校との連携が足りない】

第一は、学校との連携の問題である。いくつかの会場で、下校時刻の変更などが会員に十分伝わっていないという苦言が寄せられた。「下校の迎えのため、坂の下で待っていたのですが、子どもが来ません。下校時間が変わっていました」〔別所公民館会場〕、「下校時刻の連絡をお願いします。特に変更になっているとき。待ちぼうけがありました」〔口吉川公民館会場〕など。いっぽう、上吉川地区のように「区長を経由して登録者に下校時間表を配布している」地域もある。下校時の見守り・付き添いは、日常におこなわれる重要な活動のひとつ。会員たちは、学校との連携がスムーズに運ぶためのしぐみを望んでいる。

【子どもの態度に戸惑い】

第二は、子どもたちの態度への戸惑いである。「横断歩道を手をあげて渡らない。何故？ そのように教えているのか？」〔市教育センター会場〕、「下校時に“お帰り”と言うと、“まだ帰っていないのに”という返事。戸惑います」〔志染公民館会場〕、「単車で帰宅途中、ローソンで女子中学生がたむろしていた。早く帰りなさいと注意するが、座り込んだまま。親は何も言わないとのこと」〔挨拶する子としない子に分かれているようである〕〔以上、志染公民館会場〕といった声は枚挙にいとまがない。

【保護者はもっと協力すべき】

第三は、いまだきの保護者に対する不満・苦言である。「人の目の垣根隊」活動の中心メンバーは、小学生の祖父母世代にあたるシニア層である。子どもの態度への戸惑いは、“親はいったい何をして

いるのか」という保護者への批判につながる。「挨拶が問題になっていますが、大人同士で挨拶しているんでしょうか？」〔市教育センター会場〕、「雨降り時、傘を振り回し、郵便屋さんのバイクに当たりかけた。家庭でのしつけが大事。一応、学校には連絡し指導をお願いした」「大人でも挨拶しない。子どもの挨拶は家庭の問題である」〔以上、口吉川公民館会場〕。

また、「保護者もいま少し外に出てほしい」〔別所公民館会場〕、「児童・生徒の保護者はすべて、人の目の垣根隊に入るべきではないか」〔吉川町公民館会場〕など、保護者の協力を促す声も見られた。

会員からの要望・意見には、直ちに対応が可能なものと、そうでないものがある。ここで取り上げた3つのうち、とくに“子どもの態度”や“保護者の意識”については一朝一夕に変わるとは思えない。地域ボランティアが保護者と手を携え、いかに子どもを育てていくのか。そのためには、どのような支援体制が必要なのか。今後の課題として浮上してきた。

4. おわりに

4. 1 第2回意見交換会に参加して

2006（平成18）年11月下旬、第2回の「人の目の垣根隊」意見交換会が開催された。筆者は会員登録したこともあり、その一つJ公民館で開かれた会にオブザーバーとして参加した。

午前10時に開会、市教育委員会担当課長の挨拶、参加者の自己紹介、不審者情報の説明に続いて、情報交換、意見交換が行われた。参加者は筆者をのぞき、会員が26名（うち3名がPTA関係者、男性13名、女性13名）、対象地区にある小学校の校長・教頭4名、市職員5名、計35名である。午前中の開催ということもあり、シニア世代が大半を占めた。

意見交換では、活動に熱心な人が多いJ地区の会員を中心に、効果の上がった試み、工夫などの実践例が次々とあげられた。いっぽう、活動を通して直面している意見（苦言・要望を含む）も、J地区、M地区双方の会員より多数寄せられた。主なものを要約すると以下のようになる。

【学校に対して】

- ◇防犯ブザーが電池切れだったり、カバンの中に入れてそのままといった子どもが目立つ。学校ではどんな指導をしているのか。
- ◇不審者情報を会員に流すなど、学校がもっと積極的に協力してほしい。
- ◇下校後、遊びに出たり塾に行ったりするとき、子どもが防犯ブザーを携帯していないことが気にかかる。学校はもっと指導してほしい。

【保護者・子どもに対して】

- ◇声をかけても挨拶しない子どもが少なくない。親はいったいどういう躰をしているのか？
- ◇活動している会員を“ヒマ人”扱いする子どもがいる。
- ◇保護者はもっと活動に参加すべきである。

【事務局に対して】

- ◇登録だけしてほとんど出てこない人が多く、人数不足で思ったような活動ができない。
- ◇会員が積極的に参加するよう、当番制をとるなど組織化を進めてはどうか。
- ◇不審者を目撃した時の連絡が問題。活動のさいは携帯電話を持つよう取り決めてはどうか。

「周りの協力が得られれば、もっと効果が上がるのに……」。「私たちはこんなに頑張って活動しているのに……」。会員の熱い思いと苛立ちが、ひしひしと伝わってくるような会であった。

このような思いはよくわかる。しかし、一部の熱心な人とその他大勢のあいだの“温度差”が広がると、多くの人が付いて行けずに離れていってしまう。そして、熱心な人が抜けたとたん活動が衰退してしまうというのも、ボランティアにはよくある話である。「人の目の垣根隊」は「できる人が、できる時に、できる範囲で」がモットー。活動の可能性と限界を知り、初心に戻ることが必要ではなからうか。

4. 2 「子育て支援」の視点からの見直しを

2003（平成15）年7月、「次世代育成支援対策推進法」が成立し、地方公共団体および従業員300人を超える事業所は、国が策定した指針に沿って、次世代育成支援のための行動計画を策定することが義務づけられた。それを受け2005（平成17）年4月からは、すべての市町村において、集中的・計画的な取り組みがスタートした。法律の制定より3年、「子育てにやさしいまちづくり」を掲げる市町が増え、行政による地域の子育て支援事業も盛んにおこなわれるようになった。

少子高齢化が進むなか、子育て支援ボランティアとして最も期待されるのがシニア世代である。また、団塊の世代が大挙して定年退職を迎えはじめた今、子育て支援ボランティアに男性をいかに取り込んでいくかについても、大きな関心が寄せられている。その意味で、シニア世代が活動の中心で、しかも男性が会員の半数を占めるある「人の目の垣根隊」への期待は大きい。

とはいうものの、“防犯”という視点のみでは、活動を一時のブームに終わらせる危険性をもつと、筆者は考えている。発足1年半を迎えた「人の目の垣根隊」の活動が、今後より発展をとげるには、より広く「子育て支援」の視点から、活動の内容、あり方を見直す必要があるだろう。

そのためには、第一に、研修会などにおいて「子育て支援」の要素を取り入れることを提案したい。子育て支援についての学習というと、赤ん坊の抱き方や風呂の入れ方、幼児との遊び方といったものを思い浮かべがちだが、それだけが子育て支援の学習ではない。現代の子育て事情や、家庭や学校のおかれている状況などについて理解を深めることも、立派な子育て支援学習なのである。

「いまだきの親は」という批判的な目で親を見ないことが子育て支援の鉄則。現在60代、70代のシニア男性には、現役時代に“仕事中心”の生活を送っていた人が多く、ともすれば、子育てや親を自分基準で見てしまいがちだ。だからこそ、いまだきの親の生活実態を丹念に見つめる眼を養ってほしいものである。

提案の第二は、高校生からボランティアを募り、「人の目の垣根隊」準会員として活動に参加させ

ることである。これまで見守られる側だった子どもたちが、今後は見守る側に回り、地域の大人といっしょに活動する¹¹⁾。次世代の親を育成するという意味でも、地域の一員としての自覚を育てるためにも、有効な試みではなかろうか。

最近、家庭の教育力の低下が指摘されているが、初めから立派な親はいない。親は子育てに必要な知識と態度を身につけ、親として成長していく。そのためにも、親子に寄り添い、見守り、ときに手を差し伸べる支援者が必要だ。いっぽう、初めから完璧な支援者もいない。親と同じく、支援に必要な知識と態度を身につけ、支援者として育っていくのである。

「できる人が、できる時に、できる範囲で」とは、地域子育て支援の核心をついた絶妙なキャッチコピーである。細く長く、気負わずに続けて、地域の子育て支援力を高めていく。筆者は、子育て支援団体としての「人の目の垣根隊」の活動ぶりを今後も見守っていきたい、と考えている。

附 記

本稿は、平成17～18年度関西国際大学カウンセリング研究所プロジェクト研究補助金による研究成果の一部です。「人の目の垣根隊」事務局のある三木市立青少年センターには、貴重な資料を提供いただくなど、大変お世話になりました。調査にご協力いただいた職員の方々および「人の目の垣根隊」会員の皆様に、あつく御礼を申し上げます。

注および参考文献

- 1) 調査は、夏学期の授業「特別研究(フィールド調査)」の一環として実施された。「子どもの安全・安心」をテーマに、三木市口吉川地区、自由が丘地区、広野地区をフィールドとして3日にわたり、危険箇所を子ども目線で調査して回った。
- 2) 清水美知子「シニア世代による子育て支援の実践～加古川市「にこにこオープンルーム」を事例として」『関西国際大学研究紀要 第7号』2006年3月、清水美知子『〈孫育て〉をめぐる祖父母のライフスタイルに関する実証的研究[平成13～15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書] 2005年3月など。
- 3) 2006年6月末現在の、住民基本台帳法に基づき計算した数値である。
- 4) 三木市青少年センター「人の目の垣根隊」事務局提供の資料による。
- 5) 三木市においても、「人の目の垣根隊」発足以前から、子どもの見守り活動を実施している地区があった。たとえば、広野地区には、広野小学校区の6自治会の住民有志からなる「みまもり隊」があり、児童の登下校時に通学路をウォーキングまたは見守る活動をおこない、昼間・夜間にも防犯パトロールを実施している。
- 6) 『神戸新聞』2005年2月19日付(三木版)。
- 7) 「人の目の垣根隊設置要綱」にも、第6条に「青少年健全育成ボランティアとして次の垣根隊活動を行う」とある(傍点筆者)。
- 8) 青少年センター職員(「人の目の垣根隊」事務局)からの聞き取りによる。
- 9) 『神戸新聞』2005年5月23日付(三木版)。

地域ぐるみの子育て支援活動

- 10) 2月に実施した会員アンケートでも、「制服は目立つので抵抗があります」「オール制服着用の活動については抵抗を感じる」といった記述が見られた。
- 11) 筆者が勤務する関西国際大学では現在、学生が「人の目の垣根隊」に入会し、地域の防犯活動に参加する準備を進めている。

Abstract

In this paper, child rearing support activities with the cooperation of the whole community will be considered, using the example of the “Hito-no-me no kakine-tai”(Fence of people’s eyes) project in Miki City, Hyogo Prefecture. In June 2004, citizens of Miki City started a program to watch school children going home from school in an effort to protect them from crimes. Their combined efforts evolved into a citizens’ volunteer organization called the “Hito-no-me no kakine-tai.” Since June 2005, the volunteers have continued keeping an eye on children by greeting them and patrolling the neighborhood. Approximately 1,000 citizens are currently members of the “Hito-no-me no kakine-tai.” Their unique activities involving the whole community have drawn public attention, and they receive constant inquiries from other municipalities. The process of how the “Hito-no-me no kakine-tai” program was inaugurated as a volunteer community organization as well as its activities for the one and a half year since then will be introduced. Thereafter the future direction of the project and its activities will be considered.